

氏名	宮崎 賀乃子		
ヨミガナ	ミヤザキ カノコ		
学位の種類	博士(音楽)		
学位記番号	博音第316号		
学位授与年月日	平成31年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉フローベルガーの《組曲》における“discretion”と「記譜」の関係性について —演奏家の視点による資料間の比較を通して— 〈演奏〉J. J. フローベルガー：聖体奉挙のためのトッカータ in d (Fb WV 105) カブリッチョ in d (オルガン) 組曲 ホ短調 (チェンバロ) フェルディナント3世の痛切なる死に寄せる哀歌へ短調 他		
論文等審査委員			
主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部) 大塚 直哉
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部) 野々下 由香里
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部) 大角 欣矢
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部) 廣江 理枝
副査	慶應義塾大学	教授	(経済学部) 石井 明

(論文内容の要旨)

本論文は、17世紀にウィーンの宮廷オルガニストとして活躍したフローベルガー Johann Jacob Froberger (1616～1667) の「組曲」に焦点を当て、演奏家の視点から、演奏指示としても使われる“discretion”という語の意味するものを、どのように奏法へつなげるか、伝承資料の比較を通して論じている。

フローベルガーの「組曲」を演奏する際に一般に問題となっているのは、「どの程度自由に演奏していいのか」という点である。この「演奏の自由さ」に関して、フローベルガーの愛弟子であるヴェルテンベルクの大公妃シビラがホイヘンスに宛てた書簡には、興味深い言及が見られる。そこでは、「本来フローベルガーは自身の音楽をわかり易く記譜しているが、どのように演奏するか記譜のみから見つけ出すことは困難だ」、ということが指摘されている。記譜からだけでは読み解くことのできない演奏法とは一体どのようなものか、そのヒントを伝承資料に求めた。

この“discretion”という語を理解するためには、そもそもフローベルガーがどのようなスタンスで「組曲」を作曲していたか、また自身の音楽をどのように楽譜に残そうとしていたか、ということ踏まえる必要がある。同時代のフランス音楽と比べると、フローベルガーは、特にリュート音楽に習ってタイやシンコーションを活用し、重要な和音を強調するために音程差を巧みに利用していた。また、アルペジオの向きや速さを音価とリズムによって細かく記譜している点も独自性として指摘できる。

楽章構成については、「組曲」というタイトルは持たないものの、各楽章を互換性のない唯一のものに定め、ひとつつながりにしている点が新しい。特に冒頭楽章のアルマンド(瞑想曲や哀歌なども含む)は曲想として何かしらの著しい特徴を帯びており、フローベルガーが「組曲」作曲において最も力を注いでいる舞曲と言える。アルマンドの次に音楽的な結びつきによってどの舞曲を置くか、という点でも、フローベルガーはアルマンドを中心に、その個性を後続楽章に引き継がせながら「組曲」としてのストーリーをデザインしている、と考えられる。

“discretion”という語は、マッテゾンらが言うように、「(時間を操作する)アゴーギグ」を用いてなんらかの演奏の「自由さ」を表現するもの、と従来考えられてきた。しかし、チェンバロの音響が時間軸上で「自由」になるためには、「減衰カーブのコントロール」も必要になり、それにはアルペジオの仕方やタイの打ち直しなどが深く関係する。

この“discretion”をめぐる奏法のヒントを探すべく、伝承資料間の比較を行った結果、音の違いの他、タイやスラーの付き方、音価やリズム等、大小様々な違いが見られた。フローベルガーの「組曲」の伝承資料は大半が手稿譜であるが、伝承経路は不明な点が多い。そのため、異稿の中には筆写ミスと考えられるものも含まれている。しかし、異稿の多くはフローベルガーのレッスンや演奏時の改訂によって変更された部分が伝承されて記譜の違いを生んだケース、

“discretion”を伴った演奏において「可変的」である部分が反映された「意味のある異稿」であることが見えてきた。

具体的には、多様なアルペジオ、保続音の打ち直し、音型のリズム変更など「和声や音型を強調する表現法」であり、各異稿が違う「減衰カーブ」のコントロールによるもの、すなわち演奏者による“discretion”の結果として表れる「ゆらぎ」に含まれるものである。

このように、伝承資料の各異稿が“discretion”を伴った演奏によって生じたものも含んでいるとすると、演奏の現場では出来るだけ多くの資料情報を参照比較しながら、最適な奏法を見つけていきたい。この点、ランペ版『新全集』は資料情報が充実しており、また主資料の楽譜にその他の資料の異稿も併記していることが高く評価できる。しかし、いくつかの作品について批判的検討を行った結果、校訂報告も含め、原典資料に関する情報は誤りが多く、注意が必要であることが分かった。さらに、「拍子と整合しない箇所を綺麗に合わせる」ということや「符尾の連結の問題」など校訂に関する問題点も見られる。ランペ版は便利で有用な楽譜であることは言うまでもないが、やはり演奏者自らが原典資料を確認することの重要性を感じた。

本研究は“discretion”という見えないものを視覚化しようとしてきた。しかし、コンサートで演奏家と聴衆が音楽を共有する際、共通するのは「聴く」ということである。奏者の「目」で楽譜資料の情報を読み取ったあとは、様々な奏法を駆使して再創造した音が演奏空間でどのように響いて聴衆に届いているか、「耳」で判断することが重要である。このように目で集めた情報を耳で判断しながら音に換えることが、“discretion”を伴った演奏の一つの姿ではないだろうか。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、17世紀に活躍したJ.Jフローベルガーの《組曲》を現代においてより魅力的に演奏するために、”discretion “という言葉に注目し、残されている楽譜資料における記譜の細部の「差異」を考慮しながら、失われたdiscretionの伝統を演奏実践の形で追及しようとするものである。この語は、フローベルガー自身あるいはその近くの資料において、作品の特定の個所について「思慮深く、節度をもって自由に」演奏することを指示する語と考えられてきた。一方、フローベルガーの高弟、太公紀シビラは「フローベルガー先生に直接習ってはいないものは、正しいdiscretionを持って（フローベルガー作品を）演奏するのは不可能だ」という趣旨のことを書き残している。本研究はこのシビラの言葉を出発点にdiscretionの語の解釈を従来よりもやや拡大し、その実践の様子の一端を複数の伝承資料の比較から読みとって、それを現代におけるチェンバロ演奏に生かそうとする野心的なものである。

論文においては、このdiscretionの語の解釈を拡大するという視点は評価できるものの、この語を巡る文化史的、原理的な考察が不足していること、また伝承資料間の比較をする際に先行研究 的な議論がやや不十分であることが弱点として指摘できる一方で、演奏者の立場から、伝承資料の細部を比較し、そこからフローベルガーの時代の演奏者たちの息遣いを読み取り、現在「決定版」と考えられている新全集版の記譜上の問題点を指摘したことは、今後フローベルガーを演奏する物にとって有益な成果となった。

また学位審査会の演奏においては、分割鍵盤チェンバロ、よく使われる2段鍵盤チェンバロ、奏楽堂オルガンの中全音律ヴェルクの3台を弾き分けつつ、組曲を中心にフローベルガーの鍵盤音楽の代表的ジャンルを網羅するかたちでリサイタルが行われた。これらの研究を通じてさまざまな思考を行った成果が、魅力的な演奏となって表れていたことを高く評価したい。とくにdiscretionの語を単なる「テンポ・ルバート」としてのみ理解しているのでは得られない、アルペジオやタイのうち直しなどを含めた耳によるチェンバロの減衰カーヴのコントロールがもたらす音響の「時間軸上の自由さ」は、演奏により一層の説得力が感動を生み出していた。「節度ある、つまり一定の枠の中の」自由さ、というdiscretion本来の意味を今後も追及していってほしい。

以上、演奏と論文を総合的に評価し、博士の学位授与にふさわしいと判断した。